

文学博士前田陽一君の「パスカル『パンセ』注解第一」に対する

授賞審査要旨

本書は著者の永年にわたるパスカル研究の結実であり、その結晶とも言うべき中核部分である。周知の如く、パスカルの遺著『パンセ』は多数の抹消・訂正・書き入れのある草稿の形で残されたもの。本書の示す著者の業績は三百年にわたる原稿解説史上のいくつかの重要な新発見・新知見に伍して遜色のない新しい意義を持つものと言いうる。本書の第二部「『パンセ』原稿複読法について」を構成する三つの論文、一、「パスカルの『二つの無限』に関する断章の第一稿」、二、「『パンセ』原稿の第一稿と推敲」、三、「仕事中のパスカルーパスカルの執筆方法について」、は何れも最初フランス語で発表された論文の邦訳（論文一は邦訳に当り大幅に増補）であるが、特に論文一（一九六四年、日本フランス語フランス文学会学会誌欧文号）は欧米の学界に大きな反響を呼び、現代フランスにおけるパスカル研究の第一人者であるメナール教授はその著「パスカルの『パンセ』」（一九七六年）の巻末に附したパスカル研究史年表の一九六四年の項にこの論文発表を「『パンセ』異文の解釈を一新する」事実として掲げ、更に別の附録で、著者の方法を「複読法」と名付けて詳しく紹介している。

この方法の意義を要約すれば、パスカルの執筆の習慣、原稿の書き癖に着目した著者が、抹消・加筆・訂正の行われている多数の断章について第一稿としばらく間を置いた第二稿とを読み別けることに成功したことである。これによって、従来のすべてのテキストが異文を含めて平面的にのみ考察されて来たのに対し、起伏を望見しうるテキスト

の世界が開け、パスカルの創造的精神の活動を追尾することが可能となり、異文解釈に幾多の新知見を齎しうる結果となった。本書第一部の諸断章解釈が示す如く、著者自身この方法によって、成果をあげているばかりでなく、日本の大学での演習は別として、著者が一九七二年秋より一カ月間ソルボンヌで行ったこの方法による演習に参加したフランス・ベルギー等の新鋭の研究者の中で、この方法によって成果をあげたものがあることが報告されているほどである。本書の特色の最大のもはこの複読法が駆使されていることであるが、長所はむしろそのみにとどまるものではない。

著者の企図は単に『パンセ』断章の徹底した注解にとどまるものではなく、研究者のあらゆる要求に応えうる形で断章テキストの日本版の刊行であると言えよう。所謂第一写本の配列が最もパスカルの意図に近いとする第一写本優先説による最初の刊本を出したトゥルヌールを継承するラフェュマ氏の全集版の配列順序を基本的に採用した上で、著者は次のような手続で注解に着手する。(1)肉筆原稿の写真、(2)活字によるその忠実な転写、(3)通常のフランス語(ときにラテン語)の形での印刷、(4)邦訳、(5)注解。断章の解説に複読法を用いることによって、著者は改めて徹底的に四十種にのぼる既存の刊本・注釈のいっさいを検討批判するのであるが、その際、厳密な訓練をへた古文書学に関する知識、フランス語史、風俗史、比較文化史、聖書解釈にかかわる知見、著者が別途に開拓したフランス散文におけるリズムの研究の成果を十分に使って、幾多の伝来の疑義の解明に成功、少なからぬ数の説得力ある新知見を発表している。

本書は著者の学界への大きな貢献の記念碑とも言うべきもので、極めて高く評価される。